

イギリスの成績評価と学位の水準保証

——学問領域別学位水準の基標化——

安原 義仁

1. 学問領域別学位水準基標とは何か
イギリスの「大学評価」では、耳慣れないさまざまな専門用語が次々に登場する。ジャーゴンのようなもので、部外者には煩わしく感じられもする。しかし、イギリスの大学評価システムを理解するためには個々の専門用語を一つひとつ丹念に咀嚼していくしかない。学問領域別学位水準基標(subject benchmark statement, subject benchmarking)もそうした用語の一つであり、学生の成績評価や学位の水準保証と、密接に関わっている。本稿では、歴史学第一(BA)優等学位(イギリスの学士課程学位 bachelor's degree には、普通学位 ordinary or pass degree と優等学位 honors degree の2種類があり、通常、学生は後者をめざす)の事例に即しつつ、学問領域別学位水準基標とは何か、学生の成績評価とそれはどのように関わっているのかについて紹介することにした。

個々の高等教育機関は、ある特定の学問領域において学位プログラムを提供する場合、その性格・特性を規定することになる

が、学問領域別学位水準基標(以下、基標)はその際の参考として、第三者評価機関である高等教育水準保証機構(QAA, Quality Assurance Agency for Higher Education)が提示したものである。そこには各学問領域ごとに、授与される学位の水準について一般に期待される事柄、学位保持者が身につけておくべき属性と能力が具体的に示されている。QAAが提示する基標は第一優等学位に関してのもので、これまでの過去4年間に、歴史学、化学、経済学など計22の学問領域について作成され提示されている(第2段階として、あと25の学問領域についても予定)。実際に基標の作成にあたったのは、当該学問領域の専門家で構成されるワーキング・グループで、広く学界から選ばれ学界を代表して作業に従事した。

学問領域別学位水準基標の利用目的としては、以下の3点が挙げられている。

①個々の高等教育機関が新たな学位プログラムを立案・開発する際に、全国的な観点から参考にすべき重要な資料となる。基標は学位プログラムの詳細なカリキュラム

にまで立ち入るものではない。具体的なカリキュラムの立案・作成は各高等教育機関の責任においてなされるもので、「学位プログラム内容の特定」(programme specifications)と呼ばれる。基標は個々の高等教育機関が当該学位プログラムと、その履修を通じて達成される学習成果とのつながりを検討する際の一般的な指標となる。また、学位プログラムの立案において多様性と弾力化を促進し、一定の全国的な枠組みの中で革新的な試みを奨励する契機となる。

②各高等教育機関が、高等教育の質の保証に関する自己点検・評価を行なう際の支援材料となる。基標により、ある特定の学位プログラムの履修を通じて達成される学習成果は、学位水準について一般に期待されるものに照らして見直され評価される。

③第三者評価機関 QAA が個々の高等教育機関を対象に実施する教育評価に際しての重要な外部情報源の一つであり、当該の学位プログラムが一定の水準を満たしているかどうかについて判断する参考となる。ただし、基標は QAA による教育評価において、チェックリストとしてそのまま使われるものではない。それは、関連する当該学位プログラムの「学位プログラム内容の特定」や自己点検・評価書およびその他関係資料とともに参考資料の一つとして活用される。

2. 歴史学の学位水準基標

歴史学の基標の作成にあたったのは M.

ドートン教授(ケンブリッジ大学)や A. ポーター教授(ロンドン大学キングズカレッジ教授)をふくむ計16名からなるワーキング・グループ(座長は A. フレッチャー教授)であった。本文8頁、付録をふくめて13頁ほどの「教育水準—歴史学」(Academic standards—History)と題するその基標文書は、序文、基本前提、歴史学専攻生が身につけるべき技能と精神の資質(The Historian's skills and quality of mind)、学位プログラム内容の基準、学生の発達・成長過程、教授と学習、成績評価の内容と方法、評価基準、勧告、付録1 一定時間内での論文試験における評価基準、付録2 最低基準について、という構成になっている。詳しくみていく余裕はないが、いくつかその要点を紹介する。

(1) 歴史学専攻生が身につけるべき技能と精神の資質

上記の基標文書では、歴史学の第一優等学位プログラムは、学生に以下のような技能・資質を体得させる内容のものであるべきだとされている。

①過去の常に異なる文脈において、人びとがどのように存在し行為し思惟してきたかを理解する能力。

②文書記録およびその他の歴史資料を批判的に、かつまた共感をもって読み活用する能力。

③過去の状況や出来事や人びとの心性の複雑さと多様性についての認識力。

④歴史記録自体に内在する諸問題につい

ての理解力。

⑤基礎的な批判能力。

⑥知的独立性。

⑦上述の技能すべてに基づき、かつそれらを用いて、文章表現および口頭のいずれにおいても議論を展開させる能力。

そしてさらに、歴史学の学習を通じて学生が体得する一般的技能(generic skills)として以下の諸点を挙げている。

①自己規律。

②自己管理。

③精神の独立、主導性。

④他人と共同して活動する能力および他人の根拠ある見解を尊重すること。

⑤証拠資料やデータや情報を収集し整理し活用する能力、および情報を発見し確認し、再生させ分類し交換する適切な手段に精通していること。

⑥分析能力、および複雑なものをふくむ諸問題について検討し解決する能力。

⑦構造的で一貫性のある、明晰で流暢な口頭表現。

⑧構造的で一貫性のある、明晰で流暢な文章表現。

⑨知的統合性・成熟。

⑩共感能力と想像的洞察力。

(2) 学位プログラム内容の基準

各高等教育機関において提供される歴史学優等学位プログラムの内容は、取り扱う時代、対象とする国や文化圏、アプローチの方法や操作概念においてきわめて多様なものでありうる。しかし、歴史学に関する

どのような学位プログラムを立案する場合にも考慮しなければならない事項として、基標文書は以下の6点を列挙している。

①時期設定：歴史上の変化と連続性について学生が深く認識するよう、一定のタイムスパンをもった過去のある時期を学習させること(歴史的認識)。

②地理的拡がり：学生が比較の視点を持つよう、一つ以上の社会や文化を学習させること(比較的視野)。

③同時代史料：対象とする時期の第一次史料について批判的な学習をさせること(史料批判)。

④方法的省察：歴史学の性格や方法、社会的意味等について批判的に考えさせる(方法論)。

⑤隣接学問領域：隣接学問領域のいくつかへ導入して、多様なアプローチの方法があることを理解させる(学際的アプローチ)。

⑥論文作成：適切な指導のもとに、一定のテーマで論文を作成させる(論文作成)。

(3) 学生の知的発達・成長過程

学生は3年から4年にわたる学位プログラムの履修を通じて、学問的訓練を受けながら知識や技能等を身につけ、発達・成長していくことになる。そしてプログラム修了時には一定の水準に到達していることが期待される。学位プログラムは学生の発達・成長をどのように促進させるのか。学位水準基標では、プログラムを提供する学科はこのことについて明示する必要がある

としている。歴史学は知識を順次積み上げていくタイプの確立した体系をもった学問ではなく、どのように学んでいくかその順序に定まったものはない、というのがその理由である。

(4) 教授と学習

学位プログラムにしたがい学生が実際に授業を受け学習していく際、その手引きとなる文書が不可欠となるが、学科はまず学生に対しこれらの手引き書・案内を提供しなければならない、と上記の基標文書は強調している。このうちコース案内は、学位プログラムの内容を構成する各コースごとに、コースの達成目標とその方法、コースの構造と内容、評価方法、文献一覧等について記載したもの。また学科案内は、学科が提供する学位プログラムの種類、構造と内容、コース一覧、学位の等級基準、評価方法、それに剽窃についての注意などを記したものである。

授業形態に関しては、基標文書はおおよそ次のように述べている。すなわち、学位プログラムには、さまざまな教授・学習の場面において学生がチューターや他の学生たちと接触するフォーマルな機会が定期的に設けられていること、すべての学生が講義形式の授業（興味を起こさせ、好奇心を喚起する授業形態として）を受けるようになっていて、すべての学生がセミナーやグループ・ワークに参画するよう要求されていること、自学自習を支援する適切な助言・指導が重要であり、学生に対して然

るべき課題が与えられること、そして学生の知的発達・成長に関して批判的かつ建設的なコメントが適宜与えられること、が不可欠としている。

(5) 成績評価の内容と方法

さて、学生の学業達成度の評価に関して基標文書が学位プログラムに要求しているのは、以下の諸点である。

①評価すべき学生の諸能力は広範にわたること、また多様な教育歴と資格を持った学生が入学していることから、評価の方法・手段は複数・多様であるべきこと。

②しかしながら、評価の方法・手段の主たるものは、学生が作成する種々のタイプの論文であること。そのうちのいくつかの小論文は一定の限られた時間・空間、プレッシャーのもとで作成されるべきこと。これは剽窃を回避すると同時に、独力で作成した証となるものであり、また、さまざまな制約のある現実の状況下で、一貫した合理的かつ説得力のある議論を展開する能力など、人生を生き抜く技能 (life-skills) を学生に体得させる機会ともなる。

③第一次史料に関する理解と操作について評価すべきこと。

④歴史上の諸問題について深く検討する能力を評価すべきこと。

⑤批判能力とコミュニケーション能力、とくに口頭でのコミュニケーション能力（公的な場での演説、セミナーでの議論への寄与、セミナーでの司会、他人の報告に対する応答）を評価すべきこと。

⑥上記の批判能力やコミュニケーション能力を評価する方法としては、i) 集団での共同作業（共同研究、事実発掘、証拠分析など）、ii) 歴史文献についてのレビューやリポートをふくむ小論文の作成、iii) 歴史統計・データの処理における情報工学の利用、iv) 文献史料の検索における情報工学の活用、v) 文書館における史料調査の実体験などがあり、これらを用いること。

(6) 評価基準

学生の学業達成度を実際に評価するのは学科であり、学位プログラムを担当している教師陣である。その際、イギリスでは、学位の可否認定とともに、合格とされる場合にも第1級 (First class)、第2級上 (Upper Second class)、第2級下 (Lower Second class)、第3級 (Third class) と、学位に等級分類が付されて授与される。等級分類を付す際の評価基準を定めるのは個々の高等教育機関の学科であるが、学位水準基標文書は評価基準の設定に関して、各等級に要求される学習成果・到達度の内容・特性を明確にし、それらを学生に公表しておくべきこと、としている。そしてその一例として、一定の時間内に作成される小論文形式の試験の評価基準を付録1に掲げている。同評価基準は構造と焦点、議論と表現の質、知識の範囲の三つに分けて、各等級に要求される水準を具体的に例示しており、歴史学第一優等学位保持者が身につけておくべき知識、技能、能力をわかりやすく整理している。

おわりに

イギリスの「大学評価」は基本的には「研究評価」(RAE) と「教育評価」の二本柱からなっている。そして「教育評価」の焦点は学位・資格の質と水準をどのように保証するかにあてられている。そのための仕組みが個々の大学・高等教育機関においても、また第三者教育評価機関であるQAAにおいても工夫され、試行錯誤の努力が積み重ねられている。

本稿で紹介した学問領域別学位水準基標の設定はそうした工夫の一つであり（もちろん批判もある）、イギリスの成績評価、学位・資格の質と水準の保証そして「教育評価」を理解するうえで不可欠の事項である。イギリスの成績評価、学位・資格の質と水準の保証に関しては、学問領域別学位水準基標に基づいて各大学・高等教育機関が策定する「学位プログラム内容の特定」や、学位の等級分類や可否を決定する際に重要な役割を果たす「学外試験委員制度」についてもみていく必要があるが、これらの問題については他日を期すことにしたい。

参考文献

Academic standards-History, <http://www.qaa.ac.uk/crntwork/benchmark/benchmarking.htm>

なお関連参考文献として、村田直樹「学士号の水準：英国の苦悩—“Graduate Standards Programme” にみる英国の学士像」『IDE 現代の高等教育』No. 405, 1999年2月、大学の研究教育を考える会『大学評価とその将来』丸善, 1999年, がある。

(広島大学大学院教授/西洋教育史)